

## 常安寺

常安寺は元々大福寺と呼ばれていました。大福寺は九鬼家の菩提寺で、九鬼家が鳥羽を治めていた時期にはこの地域を代表する寺院のひとつでした。1607年に九鬼嘉隆の息子・守隆（1573-1632）がこの寺を整備した際、寺の名前が常安寺に改められました。守隆は、偉大な父を偲び、1618年につくられた大きな石灯籠をはじめとするいくつかの碑を境内のあちこちに置きました。

守隆は父の後を継いだものの、二人の家紋は異なっていました。これは、1600年の天下分け目の関ヶ原の戦いで二人が両軍勢に分かれて戦ったためです。嘉隆はかつての主君である豊臣秀吉側につき、守隆は徳川家康の軍勢に加わりました。勝利したのは家康でした。守隆は家康に父の命乞いをして恩赦を得ましたが、九鬼嘉隆はその知らせが届く前に切腹（割腹による儀式的な自害）を遂げました。両者の家紋は常安寺境内の記念碑に記されています。

嘉隆が切腹に使った刀は、嘉隆の肖像画や嘉隆の功績を記した掛け軸など、他の歴史的に重要な品々とともに常安寺に保管されています。寺の裏手には九鬼家の霊廟がありますが、嘉隆の遺体は答志島に埋葬されています。